

## 平成29年度から3か年の取組による成果と課題(第1回協議会での委員の主な御意見及びその後の取組・改善策)

	分野	H29(5月)第1回協議会での委員の方々からのご意見主旨	H29(9月)高校の取組・改善策(案)	R2(2月)の現状・取組
広報等	受験生徒数の減少について	①少子化が進む中で、吉城高校の志望者を増やせば他校が減る。中学生の取り合いはいかかかなものか。生徒数が増えることは問題か。 ②吉城高校の入学者が減少したのは、高山市内からの入学者減と、古川中の生徒が昨年今年と爆発的に飛騨神岡高校に行ったこと。その理由をしっかりと分析する必要がある。	・それぞれの高校が魅力を競うことで飛騨地区全体の教育の質が高まり生徒の選択肢が増える。 ・学校規模が小さくなると、科目選択や部活動、生徒相互の切磋琢磨が弱くなる等のデメリットの一方、生徒に細かく目が届くメリットもある。 ・入学者数の減少は、主に高山市内の生徒が吉城高校を選ばず、私立高校への入学者が増えたこと、古川中学校の生徒が多数、飛騨神岡高校を選んだこと等。両校に比して、吉城高校が魅力を十分に伝えられなかった。	【入学生徒数】 H29 115(1546) 7.4% H30 117(1466) 8.0% R1 100(1373) 7.3% R2 105(1281) 8.2% ※出願希望者数
	学校のPR・広報について	①中学生への高校説明会は、プレゼンの上手な先生に説明して欲しい。 ②高校生にどんな力を身に付けさせたいかの方向性を話して欲しい。 ③中学生にはまだ進路を自分で選択する力がないので、高校の情報や取組みをいかに上手に伝えるかが大切。生徒の魅力的な姿を見せることが効果的。 ④YCKの活動など、地域ありきの発想は、中学生や保護者に伝わりにくい。	・生徒にどのような能力を身に付けて育てるのかを明確に示していきたい。 ・入学後の学力の伸長や多様な進路ニーズへの対応は、本校の特色である。YCK等を通じたキャリア教育はそれが生徒にどんなメリットがあるかを伝えたい。 ・中学校での説明会、8月オープンスクール(今年度全て生徒が運営)や10月高校説明会では、生徒を前面に、生の姿や声を伝える。 ・ご指摘のように行政的な目線では、中学生や保護者に響かない。地域の教育資源を活用し、生徒を成長させることが目的であり、結果として、地域に愛着を持ったり、将来、地域で活躍する人が育つのが理想と考える。	①事前に担当者研修会を設ける等改善を図りました。 ②新学習指導要領に示される「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に基づき、求められる地域人材像・社会人基礎力等から新たに検討中です。 ③古川祭ボランティア、理数科課題研究発表会、学習サポーター、柏葉祭一般公開、高校生と語る会(中学校主催)、YCKプロジェクト報告会等を通して、生徒が活躍する姿を見ていただいています。 ④地域と学校の協働体制が構築され、岐阜県ふるさと教育の推進校として、地域をはじめ県内にも広く知られることになった。今後は、YCKを生かした学校教育活動の充実と発展、地域人材の育成に努めていきます。
授業改善	授業について	①高校の授業はどうしても講義形式になる。子供たちが自分たちで学ぶ取り組みを共に行い、生徒を育てていきたい。 ②熱心に教えていただいている先生方の姿を見て、今後も自信を持って指導していただきたいと感じている。	・対話型、探究型の「アクティブ・ラーニング」を積極的に導入。プレゼンなど、生徒が自ら発信する場面を多くする。 ・中学校との連続性を考え、互いの授業を積極的に見直し意見交換できる場をつくる。 ・プロジェクターなどICT関係の教育機器を充実させる(昨年度1台、本年度2台購入、順次拡充)。	①教員の意識改革による教育の質的転換が課題です。探究的な学びが学校教育活動において涵養されるように、YCKや総合的な探究の時間と各教科・科目とのつながりをもたせ、教科等横断的な取組を推進します。 ②職場の雰囲気もよく、教員はそれぞれに一生懸命取り組んでいます。校長の下、学校としての方向性をさらに明確にし、チーム学校としての取組を強化します。
	理数科について	①自分が高校を選んだときは、将来文系大学に進学すると決めていたので吉城高校理数科の選択肢はなかった。 ②理数科は名称が古臭いのではないか。「特進科」など保護者にも伝わる名称がよいのではないか。 ③理数科は理数のイメージがあり、進学クラスの認識がまだまだ低い。「特進」は吉城の特色として売りになると思う。 ④今後、飛騨アカデミーも吉城高校との関わりを考えていきたい。	・飛騨地区唯一の進学型専門学科であり、大切にしていきたい。 ・理数科独自の行事や、探究型の課題解決学習により、今後の高大接続改革(大学入試改革)にも対応できる学科である。 ・SSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)への申請や飛騨アカデミーとの連携を模索したい。 ・同時に文系進学にもしっかりと対応できることもアピールしていく。名称は「理数科」にこだわらない。	①Society5.0へ向け、文理分断からの脱却やSTEAMやデザイン思考の教育が必要とされる中、本校の理数科で学び文系大学へ進学するといった進路選択は、今後必要とされると考えています。 ②③中学での説明会では「特進科としての理数科」を強調しています。 ④研修イベント等、様々な御案内をいただいています。
学科・コース、カリキュラム、制度に関すること	キャリア教育・YCKの取組について	①地域の方々にYCKの認識が高まるといい。 ②吉高3年生と話す機会があったが、将来「働く」といことに関する意識が驚くほど希薄であった。 ③YCKプロジェクトは地域を教材とした「キャリア教育」であり、そこで学んだ生徒が、将来、地域で活躍することを期待できる。 ④YCKによって、地域の大人が高校生に夢を与えられるような活動に期待したい。地元に戻って就職するようなレールが敷けるといい。 ⑤今進めていこうとしているYCK活動を、先輩、後輩の関わりを持って、世代を超えて続けて欲しい。 ⑥YCKを授業で位置づけることは可能か。	・YCKは、学校と地域が連携し、生徒の成長と地域の活性化を進める魅力ある取組と考える。 ・地域で活躍する大人と関わる機会を持つことで、生徒の「働く」とに関する意識を高めたい。地元就職を促進する仕組みにも繋がる。 ・これら活動に教員が大きく携わっているが、地域とのコーディネーター的役割を担う人材確保や、地域の団体が主催する行事に生徒が参加することが有効的と考える。 ・高校では、「社会に開かれた教育課程」として、可能な範囲で授業に位置づける。3年生の選択科目、「地域政策(政治経済)」、「国際観光(英会話)」、「生活と福祉」等の開講を準備したい。	①保護者の認識が高まるとともに、地域の方々の認識も高まったと考えています。 ②地域の大人と語ろう会などを実施し意識改善を図っています。 ③④YCKプロジェクト活動への参加者数(延人数)が年々増加していることから、地域への愛着心・貢献心は育成されていると考えられます。 H28(818人)、H29(1101人)、H30(1401人)、R1(1956人) ⑤活動を振り返り、成果を検証しながら、改善を進めたい。 ⑥学校設定科目として2科目を設置し、参加(選択)生徒数は増加しています。 「地域課題探究」…H30(10人)→R1(25人) 「国際理解探究」…H30(4人)→R1(10人) ※普通科における学年単位での学校設定科目を検討中です。
	単位制について	①「単位制」の魅力は何か。	・幅広い科目履修や柔軟な単位認定が可能であり、それに合わせ教員の配置も増加する。	①選択科目の設置、少人数教育の実現、ICT機器の利活用により、個別最適化された学びが可能になることです。
	くくり募集について	①理数科と普通科の「くくり募集」はできないのか。	・県教委の決定により実施は可能。選択肢の1つでもある。	①変更なし。

	分野	H29(5月)第1回協議会での委員の方々からのご意見主旨	H29(9月)高校の取組・改善策(案)	R2(2月)の現状・取組
学校運営に関する こと	「チューター制度」について	①海外の大学のように2年生の先輩が1年生の世話をする「チューター制度」のようなシステムを取り入れることは可能か。	・8月オープンスクールでは、在校生が中学生に学校紹介、案内を行うことができた。入学後、様々な場面で先輩が支援するしくみをつくりたい。 ・理数科では2・3年合同のLHRを実施している。1・2年生での合同LHRやさらなる交流を検討したい。	①組織的には取り入れていません。
	「メンター制度」について	①「メンター制度」的な外部の支援の中で、YCKのプロジェクトリーダー達は、プレゼンを経験したり、人の役に立つ喜びを味わっている。	・YCKプロジェクトチームのアドバイザー的な存在として、今年度より、地域の有資格者の協力を得ている(関口さん)。 ・「教師による指導」と「外部のメンターによる支援」を組み合わせ、より多くの生徒に飛躍のチャンスを広げたい。	①様々な人との関わりの中で、生徒は育っていると感じています。
	部活動について	①部活動の大会があるときは生徒や職員にメール配信などで広報し、先生方にも応援に参加してもらえると生徒たちは喜ぶ。	・大会日程や時間などの情報を「メール配信システム」を利用し、生徒保護者に積極的に広報することとした。 ・平成30年度より、独自選抜枠を、これまでのサッカーに加え、陸上、女子バレーボール、剣道に拡充。	①年間一覧を作成・配布するなど、更に広報に努めます。
地域連携に関する こと	中学校との連携について	①中学生と高校生がともに関われる古川祭英語観光案内ボランティアをより充実させたい。	・高校生が中学校と共同で参加し、振り返りを行うことで理解を深めさせたい。保小中高の間で様々な連携の可能性があると考えられる。	①現在、延べ200名程度の生徒が古川祭ボランティアに参加しています。
	サイエンス教室 等	①「小学生サイエンス教室」は良い取組みだが神岡小学校に案内が来ていない。古川だけでなく飛騨市全域に広げてはどうか。	・今年度から神岡小にも案内、8名の参加があった。 ・「小中学生学習サポーター」を今年度から国府中学校にも拡充。 ・今年度、「英会話」で増島保育園の園児に高校生が英語の絵本の読み聞かせなどの交流も行った。 ・これらの活動により、異年齢間の繋がりや、「人に教えること」による生徒の成長を期待する。	①改善しました。
	地域との連携、地域からの 応援について	①地域に大切な高校であり、応援団の方々を増やしていただきたい。 ②地域の繋がりを考えて、古川祭を学校の休業日に振り替えてはどうか。 ③「市立高校」という認識であり、市がこれまで支援してこなかったことが問題。市にも協力できることがたくさんある。	・地域の未来に貢献できる高校として評価されるように努力したい。 ・古川祭を休校日にできるか年間行事の見直しを検討する。今年度から飛騨市のご配慮で、杉崎のサッカーグラウンドで無償で練習できるサッカー部が、祭りの手伝い等の要請があれば、協力したい。 ・柏葉祭は今年度から試験的に一般公開とした。来年度70周年記念事業を好機ととらえ、地域や卒業生の方々との連携を深めたい。 ・「コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)」があり、運営予算は県だが、学校運営は地域住民の意思が反映される制度も選択肢の1つである。	①年々地域の支援が分厚くなっていると感じています。 ②H30年度は振替え休業日としました。今年度は1日が週休日であったため必用がありませんでした(次年度も同様)。 ③飛騨市からの支援が年々分厚くなっており、大変ありがたく感じています。
地域連携に関する こと	アルバイト、インターンシップ等、就業体験について	①生徒は真面目だが、もっとのびのびと、企業と密着しても良いのではないか。 ②世間でもまれるような活動を経験させると良い。高校生がアルバイトで金を稼ぐのは良い体験。大人や地域が見守る中で経験を積みながら、多くの生徒に地域のことを知ってもらいたい。	・就業体験など、実社会と関わる体験の重要性は学校として十分に理解している。経済的な理由でアルバイトが必要な生徒もいる。 ・悪質な事業者による不法な就労等を防ぐため、就業先の確認、生徒の成績の状況、保護者の承認等を受けて許可制としている。 ・今後、高校1年生段階で「総合的な学習の時間」の一環として、企業の方々との交流の機会を設けたり、3年生「政治経済」の授業で企業の方の話の聞く、また、インターンシップの規模や方法について見直し(現在は公共機関や医療機関へのインターンシップの希望者が多い)等により、地元企業への理解を促進したい。 ・また、地域外に進学した生徒と地元企業を繋ぐ仕組みについて、商工課とも連携しながら検討したい。	①②職場体験等を通して、生徒が社会人基礎力の必要性に気付くなど、学校での学びとの往還を図っています。 ※地域の企業説明会や地域の方との交流会もそのような機会として設定しています。